

---

# 現代中国の政治体制の変容

——文明論のアプローチよりの考察——

趙 宏 偉

〈法政大学〉

## I. 文明論のアプローチ

文明とは人間の精神的所産としての狭義の文化に対し、人間の精神的物質的所産の複合体を指す。ハンティントンの『文明の衝突』が文明論アプローチによる国際関係の分析だと考えれば、文明論アプローチによる政治学研究として「政治文明論」は提起されるべきであろう。

政治文明論は文明の地域性を認める。どの文明も特定の地域で生まれ、伝承される。

政治文明論は文明の伝承性を重要視する。文明は伝承の中で自律的に進化する。

政治文明論は文明の相対性を主張する。西洋の文明対その他の野蛮、愚昧といった文明の絶対性説を認めない。

政治文明論は文明の融合性を認識する。文明の変化は自律的な進化のほかに、他文明から影響を受けること、他文明を受け入れること、または他文明に溶け込むことといった文明の融合を通して進められる。

このような政治文明論の理論枠組が現代中国の政治体制を説明するのに用いられると、仮説として次のような説明枠組が組み立てられよう。

中国文明、それに日本文明、朝鮮文明は、世界の他の数千年前に発祥した文明、たとえば古代地中海地域の諸文明と比べると、断絶することなく数千年にわたって代々伝承してきたことを特徴とし、伝承性が強い。よって、中国の政治体制の変容は外からの衝撃に対する反応、歴史の断絶をもたらす資本主義または社会主義革命によるものがあるが、中国の政治文明史の連続性が本流をなしている。これを「中華本流」と呼ぶ。

中国の政治文明、政治体制は相対性をもつ。つまり西洋の政治文明、民主主義政治体制も絶対性を持つものではなく、それと異なる中国の政治文明、政治体制に対して、より文明的ともより野蛮的とも判断すべきではない。中国政治の研究の多くは、善悪類の価値判断や西洋スタンダードよりの距離の測量を問題意識としているが、それよりは、現代中国の政治体制の在り方、存在根拠、その自律的変容の状況とメカニズムの探究が有用である。

中国の政治文明、政治体制は融合性を持ち、民主主義、共産主義といった西洋の政治理念を受け入れた。現代中国の政治体制の変容は、歴史の伝承という本流に異文明が影響を及ぼすというメカニズムの中で実現される。

私はかつて古代社会と国家の成立にまで遡って現代中国の政治体制を説明することに挑んだが、これも文明論アプローチによる研究といえよう（『中国重層集権体制と経済発展』東京大学出版会、1998年。*Political Regime of Contemporary China*, University Press of America, 2003）。その研究は主に以下の諸点を論じた。

華北地域の地理、気候などの自然環境、それに2500年前という早い時期での鉄器農具と牛耕の普及により、独立農家を中心的な存在とする古代社会が形成された。これは近代以前の世界で中国にしかみられない現象である。

このような社会には、中世ヨーロッパにあるような領主、荘園主といった類の中間統治装置は存在しなかった。そこで砂の如くの独立農家を統治するには、官僚制が必要不可欠な装置となった。古代官僚制の成立も近代以前の世界で中国にしか見られない現象である。

前述した諸特徴は、中国の政治体制の特徴を規定した。官僚制の効率性により、統治者が広大な地域を統治できるようになり、統一の大中国ができあがった。しかし官僚制の限界性により、統治者は大中国を省ごとに分けて統治を行わざるを得ず、また官僚による「官治」が届かない村のような社会末端レベルで「民治」という民間エリートによる自治を行ってきた。このような末端と中間の各層では地方統治者に支配地域の全権力が集中し、そして省レベルの統治者は中央レベルの政策決定において当然な参加者でもあった。こうした権力構造はまだ中国にしかみられないものであり、今日に至るまで伝承されている。このような特徴をもつ中国の政治体制は「重層集権体制」と性格付けられる。

## II. 中国の政治文明の本流と共産党の「全民党」「中華党」への変身

以下、文明論アプローチを用いて江沢民時代以来の政治変動を検証してみたい。

『共産党規約』にある党の階級性の規定はかつて「党は中国労働者階級の前衛隊」であったが、第16回党大会で「中国人民と中華民族の前衛隊」という概念が付け加えられた。共産党は「全民党」「中華党」への階級性の転換を遂げた。

その最初のステップは1997年に見られた。江沢民は第15回党大会での報告の中で、共産党革命史を説明し直した。それまでの共産党革命史は1919年の「五・四運動」を起点としてきたが、江沢民は共産党革命史を中華振興史に置き換えて、20世紀初頭に遡り、孫文、毛沢東、鄧小平の3人を「中華振興」の3回の大転換をリードした偉大な3人とした。従来のような資本主義革命の孫文とか、社会主義革命の毛沢東たちといった階級論を変えた。

こうした中華振興史の延長線上に、江沢民が自らに課した使命は、5年後の第16回党大会で明らかになった。それは共産党を中華振興のための「中華党」に変えることであった。

冷戦が終結した後、中国のエリート層の中で、百年来西洋の資本主義に憧れたり、西洋の共産主義、社会主義に引き付けられたりしてきた経験を反省して、自らの文明という本流に意識的に回帰する傾向が強く現れた。江沢民は党創始者の代わりに孫文を革命の祖とした。

文明論アプローチは政治家の個人史を重要視する。江沢民と胡錦濤は同じ安徽省から江

蘇省北部の蘇北地方に移民した明清徽商の名家に生まれ、同郷、同階級という育ちである。また江沢民と胡錦濤は中華知識エリートを育てる名門小学校、中高等学校、大学の卒業である。鄧小平は同じタイプの政治家を後継に選んだわけである。

胡錦濤も中華本流を強く意識する中華エリートである。彼が党総書記に選ばれた翌日に発布された履歴の1行目には、「安徽省績溪县人」とあった。しかし胡錦濤は江蘇省泰州市の胡家の5代目であり、戸籍法上でも習慣上でも安徽省績溪县人ではない。胡錦濤が拘っているのは、績溪县胡家の1600年の歴史、明朝の重臣、明清の豪商、民国の国学大師（胡適）を輩出してきた家系、その本家48代目子孫としての誇りなのである。

### III. 中国の政治文明の再建と政治体制改革

第16回党大会は政治体制改革の目的として「政治文明の建設」という新用語を用いた。政治文明という言葉は、中国社会で民主主義を意味する西洋文明というものではなく、野蛮の対極としての政治文明である。伝統的な中国の政治文明は、知識エリート政治の文明に言い換えることができる。科挙を勝ち抜いた大知識人たちは「文明人」であり、文明人による立派な政治は文明的な政治である。無学の民たちが政治を行ったら混乱を来す。それは野蛮な政治である。政治文明の建設は中華本流の政治文明を再建することである。

政治体制改革は主に党内の民主化、権力分立の進展、末端レベルでの直接選挙の拡大という三つの分野において前進が期待できる。その主な目標は党の政治基盤の拡大、政治と行政の能率化、党領導と法支配の整合性の向上である。このような政治体制改革は、政治体制の重層集権体制から中国式の重層民主主義体制への移行をもたらしていくと思われる。かつての層をなしている権力集中から、層をなしている中国式のエリート民主主義へと変容することである。

末端の層では直接選挙を行う。その上の中間の層では、党委員会と立法府の一体化、行政の決定と執行と監督の分立という独特の権力分立のシステムを構築するが、直接選挙は行わない。中央指導者という層では、直接選挙を行わないが、2期10年までの任期制と70歳定年制を以ってその権力と権威の絶対性を一定程度相対化する。これらは今の時点で見える中国の「政治文明の建設」の形であり、中国特色的「社会主義民主体制」の形である。

改革の重点とされている党内民主化は、資本家を含む各界のエリートを共産党内に集め、党内民主主義を利用して主に7000万人の党員からスーパーエリートたちを選び出し、さらに知識エリートを駆使して民をうまく支配するといった機能を備える政治体制の構築を目的としている。政治体制改革がめざしている政治文明とは、このような7000万人の党員を中心とする知識エリートの内輪のものである。

### IV. 「中華世界」の再構築——「長兄外交」の展開

中華本流の復興の時代を裏付ける事例として中華世界の再構築があげられる。

江沢民は鄧小平から全権力を委譲されてから、外交戦略として「新安全観」を打ち出し

た。それは鄧小平時代までの非同盟を訴える「中国式孤立主義」を脱して近隣諸国と多種多様な集団体制をつくる戦略である。2003年現在、中国は「中亜共同体」を目標とする上海協力機構を作り上げ、「東亜共同体」の構築を目的にASEANと「自由貿易枠組協定」を結び、日本と韓国ともFTAを目指すことに合意した。さらに北朝鮮の核問題に対してかつてないほど積極的に取り組み、中国は北東アジア集団安全保障体制の構築を目指している。

江沢民以来の中国外交は「長兄外交」という概念で言い表せる。そして「長兄外交」という外交文化は、かつての「華夷秩序」「朝貢外交」に伝統を求めることができる。

## V. まとめ

江沢民は鄧小平から全権力の委譲を受けた95年ごろから、政治、外交政策の大転換を進めてきた。その諸政策を文明論アプローチから検証すると、百年来、中国の知識エリートたちは、西洋の資本主義や民主主義を学んだり、西洋の共産主義や社会主義を実践したりしてきたが、20世紀90年代の半ばから自らの伝統である中華文明の本流に意識的に回帰するという歴史の流れが浮き彫りになる。中国は中華本流の復興の時代にあるといえる。

このような政治局面での変化をどのように評価すべきであろうか。それらは、中国にとって主にプラスなのかそれとも主にマイナスなのか、そしてどんなプラスを、またはマイナスをもたらすのであろうか。2003年現在で言えることは、今までは主にプラスをもたらしてきたが、今後、長いスパンで展望する場合は疑問符が付くということである。